

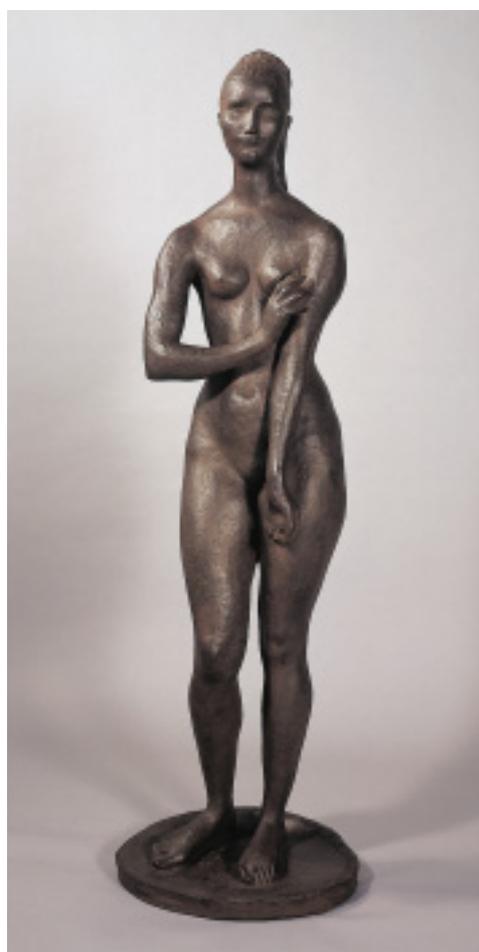
石川県立美術館だより

平成16年2月1日発行 第244号

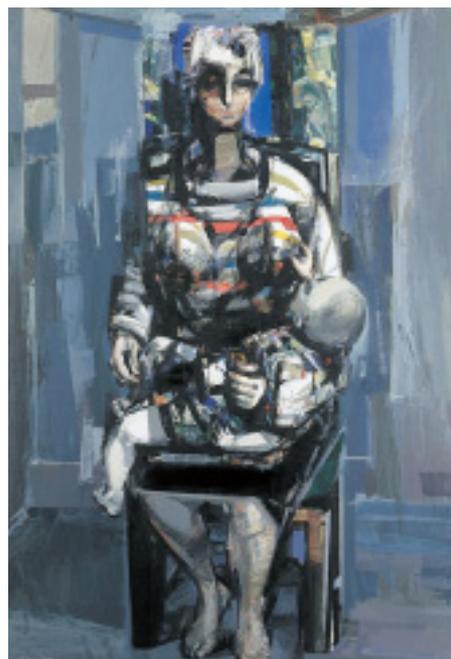
特集

さまざまな人体表現

2月6日(金)～3月3日(水) 会期中無休
午前9時30分～午後5時 入館は午後4時30分まで)



女ボニテール
畠村直久



母子
高光一也



海の伝説
梅川三省

目次

遊戯具と調度、石川県の仏画	2
さまざまな人体表現、明治の工芸(後期) ...	3
常設展示室 主な展示作品	4
美術館小史・余話(41)	4
展覧会回顧(畠山記念館名品展).....	5

平成16年度友の会会員募集	5
連続講座報告・第3回(美術館よもやま話 ..)	6
企画展示室、2月の行事案内	7
所蔵品紹介、次回の展覧会他	8

URL <http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/>

常設展示室 前田育徳会展示室)

特集

遊戯具と調度

2月6日(金)~3月3日(水)

今回の前田育徳会展示室は、加賀藩主前田家が収集した美術工芸品のなかから、香道具を主とした遊戯具に、漆芸品を中心に絵画を取り合わせた調度類を展示します。

香を楽しむことは仏教とともに飛鳥・奈良時代にわが国に伝わり、室町時代には当時一流の文化人であり香木の鑑定にも秀でていたといわれる三條西実隆をはじめ、飯尾宗祇や志野宗信などがサロンを形成し、そこに日本独特の香りの文化が生まれました。香道は茶道、華道などの諸芸道が相互に交流・補充することで、個々の芸道としての独自の道確立してゆきました。江戸時代には組香が起り、十八世紀半ばにはそのピークを迎えたといえます。組香とは数種類の香木の香りの違いを聞き当てる競技であり、またその香の組み合わせのことをいいます。和歌、物語、漢詩、故事来歴などの文学的素養を必須とする芸道で、代表的な組香に源氏香、競馬香、宇治山香などがあります。今回展示する四種盤や桑十組盤などの盤物は、対戦形式で行う組香の一種で、どちらの組がどれだけ聞き当てたかを、すぐろくのように視覚的にも楽しめるものです。さらに香割道具や、組香に必要な各種の道具を納めた十種香箱、唐物香盆などの香道具とともに、将棋盤や碁盤を展示します。この将棋盤や碁盤は業平碁と呼ばれる地文様に、「抱き牡丹」と呼ばれる鷹司家の家紋が配されています。同家から前田家へ、十二代藩主人の真龍院と十四代藩主夫人の顕光院が興入れしており、どちらかの持参品の可能性があります。

そのほか光格天皇(一七七一一一八四〇)の遺愛品で、明治七年(一八七四)に十四代藩主慶寧に下賜された書棚など二十六点の展示ですが、優れた技術を駆使したものや豪華な舶来品の数々から、華やかさのなかに大名家の格式ともいっべき趣を感じとっていたかけるのではないでしょう。

わが国には仏教絵画の遺品が非常に多く遺されています。ことに古代から中世にかけては、絵画遺品の大部分は仏教のもので占められています。それは、仏教が長い期間にわたって流行し、その信仰に伴って多くの仏教絵画が制作されてきたことによるものです。しかもその作品が、絹や紙といった脆弱で滅びやすい材質でありながら、長く今日まで伝えられてきたのは、それらの絵画が仏教の聖画として、常に篤い信仰によって護持され、寺院という聖域に大切に置かれてきたからにほかなりません。

これらの仏画は、多岐多様にわたっていますが、おおよそ次の三つに分類することができます。

一 顕教絵画

後述の密教に対し、言葉であらさまに説かれた教えという意味の顕教の絵画で、説話画、涅槃図、仏伝図、变相図などがこれにあたります。今回の出品作では、「仏涅槃図」(高蔵寺蔵)があげられます。

二 浄土教絵画

大乘仏教で説かれる、諸仏の浄土の教説に基づいて展開した浄土教の絵画で、中でも阿彌陀仏への帰依により、死後には安楽世界が約束されるという阿彌陀仏とその浄土極楽についてのものが大多数を占めています。变相図、来迎図などで、今回は「阿彌陀三尊来迎図」(西念寺蔵)が出品されます。

三 密教絵画

秘密教の意とされる密教の絵画のことです。密教では加持祈祷の修法を重んじており、その際に諸尊の図像や曼荼羅を必要としました。今回の出品作では、「両界曼荼羅図」(金蔵寺蔵)、「愛染宝塔曼荼羅図」(平岡野神社)があります。

今回はこれらのほかに、弘法大師の画像、十六羅漢図、垂迹図などを加えた十三点を展示します。

常設展示室 第2展示室)

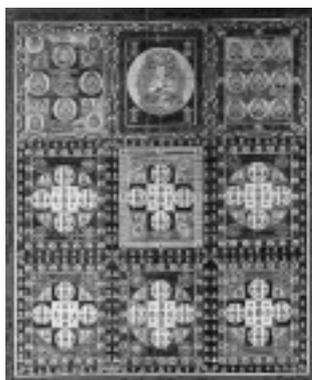
特集

石川県の仏画

2月6日(金)~3月3日(水)



阿彌陀三尊来迎図 西念寺蔵



両界曼荼羅図(金剛界) 金蔵寺蔵

常設展示室 第4展示室)

特集

さまざまな人体表現

2月6日(金)~ 3月3日(水)



女神
上條陽子



南方従軍素描集「捕虜」
宮本三郎

人が日常目にし、最も関心をいだくもの。それは人そのものに他ならないのではないだろうか。自分自身、兄弟、父母、祖父母、親戚、友人、路傍で出会う見知らぬ人達。私たちは人に囲まれて生きています。当然、芸術のテーマとして人、あるいは人体は最大のもので、美術全集をご覧いただければ、いかに人を描いたものが多いかお分かりになるでしょう。それは驚くばかりです。

人の形は古来洋の東西を問わず、数多く描かれ、刻まれてきました。むろんそこには神の像や仏の像も含まれます。たとえ神話や聖書では、神が自らの姿に似せて人を創ったとしても、神像と仏像、それは人の形の反映です。私たちはそこに人の姿の理想像を見るのです。

あまた創り続けられてきた人物像は、形としては、頭部のみであったり、半身像であったり、全身像であったり、時にはトルソであったりと多岐に渡ります。その表現も極めてリアルなもの、理想的なもの、ドラマチックなもの、抽象的なもの、象徴性を帯びたものなど、実に様々です。そしてこうした様式の上に個々の作家のスタイルが加味され、私たちの目と心を惹きつけてやまないのです。

今回の特集『さまざまな人体表現』は、館蔵の絵画(日本画・洋画・素描・版画)と彫刻作品の中から、人体をテーマとした優品をご覧いただくものです。

昭和一〇年代の自然主義的で優美な彫刻と素描、ダイナミックに変貌していった昭和二〇年代から三〇年代の洋画、四〇年代以降の具象作家の成熟した作品群そして、これら写実系の作品に対し、別の視点に立つ画家たちの奔放な表現。

人物、人体をテーマにした様々な作品を、この機会にぜひご堪能ください。

- 主な作品
- 宮本三郎 南方従軍素描集より4面 昭和17年
 - 高光一也 裸婦 昭和27年
 - 畝村直久 女(ポニーテール) 昭和34年
 - 梅川三省 海の伝説 昭和48年
 - 鴨居玲 酔って候 昭和59年
 - 百々俊雅 夢想 平成元年
 - 上條陽子 女神 平成5年

前号で書いたように初めて「明治の工芸」を開催したのは、開館一周年にあたる昭和五十九年度でした。それまで、ほとんど日の目を見ないような扱いをされていたこの時期の工芸を特集展示するのは、極めて稀であり、多くの美術関係者から驚きと当惑も混ざった目で見られた記憶があります。

事実、最初なるが故に、東京国立博物館と京都国立博物館に所蔵されている石川県関係の陶磁・漆工・金工の三分野の作品を借用し、当館の所蔵品とあわせて展示することで、まずは明治期の工芸作品の全体像をつかもうとしたのです。

その結果として、当館収蔵品の多くは東京国立博物館のそれと比べて、遜色のないものであることが確認でき、大きな収穫でした。そして、国内に残されている石川県関係の工芸の傾向をつかむこともできたのです。

更に、浅井一毫の東京国立博物館所蔵作品「赤絵金彩草花文花瓶」と京都国立博物館所蔵作品「金安謝絵山水花瓶」が、実際はもともと一対の作品であったものが、別々に所蔵されていたことも判明しました。写真図版も不十分な所蔵目録にしか頼るものがなかった準備段階では、その作品名からして、全く予想していなかったことであり、実際に作品を借用して初めてその事実気がついたのです。まさに、収蔵庫の片隅に追いやられていたものを、埃を払いのけてそのまま展示することの頼りなき、危うさを痛感した次第です。

いずれにしてもこの最初の試みにより、以後毎年、当館の収蔵品を主体に組み合わせを工夫しながら自信を持って、展示を続けることが可能になったのです。それは、他の美術館にはない特色ある展示にもなり、明治期は江戸時代と現代とをつなぐ重要な位置づけを持つということに、理解と関心が深まる確かな手応えをますます感じるようになってきたのです。

常設展示室 第5展示室)

特集

明治の工芸(後期)

2月6日(金)~ 3月3日(水)



色絵金彩花詰蓋物 清水美山



蒔絵芦雁図額 沢田宗沢

常設展示室

主な展示作品

2月6日(金)~3月3日(水)

●=国宝 =重要文化財
 =石川県指定文化財



大島紬花菱文着物



十六羅漢図 霊泉寺蔵

前田育徳会展示室

特集 遊戯具と調度
村梨子 地唐松唐草御紋蒔絵十種香箱
花鳥図
霰蒔絵小挟箱

王 若水

第1展示室

●色絵雄香炉
色絵雌雄香炉

野々村仁清
野々村仁清

第2展示室(古美術)

色絵鶉草花図平鉢 古九谷
青手樹木図平鉢 古九谷
特集 石川県の仏画
両界曼荼羅図
白山曼荼羅図
十六羅漢図

金蔵寺蔵
辰口町蔵
霊泉寺蔵

第3展示室(日本画・油彩画・彫塑)

油彩画
コレクシオン・囲まれた男
曲と直の自然則
待つ女
牧歌
彫塑

大場吉美
西田洋一郎
松本 昇
宮本三郎

石田康夫
得能節朗

第4展示室(日本画・油彩画・水彩・素描・版画・彫塑)

特集 ささまざまな人体表現
3ページをご覧下さい

第5展示室(工芸)

染織
牛首細籬文着物
大島紬花菱文着物
特集 明治の工芸(後期)
色絵金彩花鳥文大香炉
蒔絵芦雁図額

九谷庄三
沢田宗沢

第6展示室(日本画)

御水送り神事
竹梅図
春を待つ
観覧料

黒田櫻の園
鈴木華邨
曲子明良

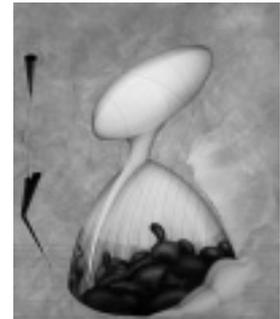
一般 350円	個人	一般 280円	団体(20名以上)
大学生 280円		大学生 220円	
高校生以下は 無料		高校生以下は 無料	



竹梅図 鈴木華邨



海 石田康夫



コレクシオン・囲まれた男 大場吉美

美術館小史・余話 41 嶋崎 丞(当館館長)

新美術館の施設内容

美術館の生命は、一般にその施設内容の在り方によって決定するといわれる。旧石川県美術館は、工芸品を中心とした古美術と、現代の伝統工芸品を展示することを目的として、谷口吉郎氏の設計により建設されたものであることは、この連載の3回目で述べた通りであるが、実に工芸品が見事に映える美術館であった。しかし、新館を建設する準備段階頃の昭和50~60年代のいわゆる美術館建設ブーム時期に建設された日本各地の美術館を見てみると、建築家の建築作品という感じの美術館(ある意味では大切な条件であることは事実だが)が多く、美術館活動の機能面から見ると問題を抱えている美術館が多かったように思われた。

そのような美術館は、絶対造るべきではないとの強い信念から、私は設計者ととことん議論する必要を感じた。新館の設計者は、富家宏泰氏で、富家建設事務所のスタッフの方々に対しては、随分と無理難題をお願いした。当館の構造を見て、他の多くの美術館と異なる点は、各展示室が全く個々独立した方式をとっていることである。多くの美術館は、展示室が連続したいわゆる廻廊方式をとっているものが多いが、この方式をとると動線(見る順路)が次の展示室へ移動する関係から、必ず往復したり、交差する個所が生ずる。独立方式は出入り口が同じであるため、動線は極めて明快に設定することができる。また、各展示室の温湿度も個々の展示作品に応じて設定できるメリットがあり、この方式で行こうということになった。そのため展示室の配置や、それに伴う空調システムを数多く設定する必要があり、建築事務所に随分と苦勞をかけたが、今でも見学に来館する方々は、その配慮の見事さに驚いている。

展覧会回顧

「畠山記念館名品展 - 茶道美術を中心に - 」

当館の開館20周年を記念して開催いたしました「畠山記念館名品展 - 茶道美術を中心に - 」は、これまで他館への作品の貸し出しを行わないことを運営方針としてきた同館が、出身地の七尾市について、ゆかりの地金沢ということで、特別な配慮を頂き実現したものでした。書蹟12点、絵画18点、茶道具(茶入・茶器・茶碗・茶杓・水指・花入・香炉・香合・釜・炭具・菓子器)51点、懐石15点、文房具・調度4点の計100点。国宝3点、重文19点、重美5点。大名物8点、名物3点、中興名物3点、八幡名物2点(国宝等と大名物等は3点重複)を含むという文字どおりの名品展でした。茶道が盛んな金沢ということで、茶道美術を中心に出品頂きましたので、展示構成に工夫をいたしました。ケース内に左右に結界の袖パネルを立て、畳床を置いた簡易床の間を二カ所

設けて、一カ所には国宝煙寺晩鐘図(前期)、国宝林檎花図(後期)と中興名物古銅象耳花入を、もう一カ所には国宝藤原佐理書状と中興名物古瀬戸肩衝茶入 銘



畠山、小堀遠州作竹一重切花入 銘初音を展示し、即翁の取り合わせを再現してみました。畠山記念館においても、これだけの名品が一堂に展示される機会はないということもあり、近県はもとより全国各地から問い合わせ、来館者がありました。

すばらしい美術品の数々は、数寄者即翁の審美眼により収集されたものですが、長い間の日本人の美意識を表しています。例えば、伝統工芸技術の継承において、武器・武具の製作と、伊勢神宮式年遷宮御神宝製作が果たした役割が大きいと同様に、古美術品が後世に伝世されてきたことに対して茶道が果たしてきた役割の大きさを改めて認識させられました。

(南 俊英 学芸第一課長)

平成16年度 友の会会員募集

3月1日(月)から受付開始!!
郵便でのお申し込みは郵便振替で

平成16年度友の会会員は次の要領で募集いたします。現会員の方で継続をご希望される場合でも、改めてお申し込み下さい。お申し込みがない場合はそのまま退会となります。

会費、特典等につきましては、平成16年度より大幅に見直されました。本文中の波線部分が変更されたところです。

募集定員 1,500名

会費 2,000円(郵送料と事務諸経費)

受付期間 3月1日(月)より開始し、募集定員に達し次第締め切ります。

3月4日(木)、5日(金)、28日(日)~31日(水)は展示替えによる休館日ですのでご注意ください。

入会手続き

次のA、Bいずれかの方法でお願いいたします。

A 当館へご来館になり、受付へお申し出下さい。

会員証はその場で発行します。

当館中央ロビー奥の図書閲覧室で受付いたします。入会申込書は閲覧室内にも常備してありますが、現会員の方は今回同封の入会申込書に所定事項をご記入の上、会費(現金)とともにお出し下さい。

受付時間は、休館日を除く午前9時30分から午後4時30分までです。

B 郵便振替用紙をご利用下さい。会員証は3月末から美術館だよりと共に郵送します。

同封の郵便振替用紙に所定事項をご記入の上、最寄りの郵便局窓口へお出し下さい。

郵便振替口座 00700-7-46490

加入者名 石川県立美術館友の会

払込料金70円は申込者負担となります。

会員証は『美術館だより』と一緒に、3月末頃からお送りする予定です。

白色の図書閲覧室受付専用紙や返信用封筒、返信用切手は必要ありませんので、郵送しないで下さい。

振替用紙の受領証は、会費送付の証明となるものですから、お手許で大切に保管しておいて下さい。郵便局備え付けの振替用紙をご使用の場合は、通信欄に下記事項をご記入下さい。

年齢 性別 会員の区別(継続・新規・元) 職業
継続会員の方は現会員番号

その他

会員証の有効期間は平成16年4月1日~17年3月末日です。

会員は記名者本人のみとします。(ご家族の方との連名受付はいたしません。)

会員証提示による入館料割引は、会員の方1名と同伴者2名の、合わせて3名まで受けられます。

一度納入された会費は、お返しいたしません。

会員証紛失による再発行は受け付けません。

会員の特典

当館の企画展・常設展入場券

当館の企画展と常設展に、各1回ずつ無料で入場できます。

当館企画展の開会式にご招待

入館料の割引

受付での会員証提示により、当館主催展覧会観覧料が団体料金なみに割引されます。また石川県立歴史博物館、石川県七尾美術館、石川県輪島漆芸美術館、石川県九谷焼美術館、石川県能登島ガラス美術館の各館主催展覧会でも同様の扱い(ただし同伴者割引なし)となります。

当館主催諸行事への参加

現地見学やギャラリートーク、ミュージアム・コンサート等の諸行事に参加できます。

『石川県立美術館だより』の郵送

当館の最新情報をお伝えする『石川県立美術館だより』(毎月1日発行)が毎月郵送されます。会員を対象とした行事のお知らせも掲載されています。

● 連続講座報告・第3回 ●
開館20周年記念連続講座
「美術館よもやま話」
講師：嶋崎 丞(当館館長)

加賀藩の尊經閣文庫(10月19日)

「尊經閣文庫」の内容を地元の方が、どれくらいご存じなのだろうか、今日は考えてみたいと思います。

五代藩主綱紀は、自分が収集した図書資料に「尊經閣蔵書」という名称を使っています。また、十六代当主前田利為は、昭和3年にイギリスの大使館付武官の時に、ヨーロッパ各地からいろんな書跡・資料を集めてプラスアルファし、内容を充実しようと努力されました。大正12年、関東大震災が起こり東京にあった多くの大名屋敷の貴重な文物が、ほとんど灰燼に帰ってしまったことから、利為はこの年に蔵を建てて、その中に前田家代々の文物を収蔵し、管理保存することにしました。その時、前述の「尊經閣蔵書」にちなんで、「尊經閣文庫」という名称が付けられたと聞いております。

その「尊經閣文庫」がお里帰りできないものかという、大キャンペーンがさかんにいわれています。多分に美術工芸品を中心に見て楽しめるお宝が多いものと期待を寄せて、例えば二の丸御殿を復興し、その中に展示をすることで、県民もさることながら、観光客を集めたいというお考えをお持ちの方が多いのではないのでしょうか。実は、その内容は、主として書跡・典籍が中心になっているのです。

三代藩主前田利常は、書跡・典籍に大変関心を持っていた藩主でした。五代の綱紀は、利常が集めたものを「小松蔵書」という名称を付けております。また、自分の父親の四代光高のものは「金沢蔵書」と呼んでおりますが、実際には極めて少なかったようです。

そこで内容を見ますと利常の収集したものは、日本での最高の文物、例えば『土佐日記』のように、紀貫之の自筆本を藤原定家が写した、日本でただこれ1点しかない、また、現在五島美術館所蔵の『「梅溪」号』という、大燈国師の墨蹟、これも日本でただ1点しかない、というようなものの集め方が、利常の場合は多かったのではないかと考えられます。

一方、綱紀のものは、完全に歴史資料としての、古文書とか古記録、中国やヨーロッパのものまでも含めて、そういう古文献記録中心の資料を体系的に集めているものが多いということが出来ます。

その文書・典籍のうちに、現在国宝が19点、重要文化財が54点あります。ただ、歴代藩主が着ていた鎧・兜・陣羽織、あるいは茶の湯の関係のわずかな調度品など、そういうものも前田育徳会の収蔵品になっています。今日は、前田育徳会イコール尊經閣文庫というような考え方で、尊經閣文庫と前田育徳会の関係というのはほとんど異名同音であるというようにいい方ができるのではないかと思います。

金沢展40年を振り返って(11月9日)

私は日本伝統工芸展の第十回展、すなわち最初の金沢展から、幸いなことに全部関係いたしました。前の県立美術館は、昭和33年から準備にかかりまして、開館は翌34年の秋でした。この33年というのは、ちょうど日展が芸術院から離れて新日展という組織替の時期でした。いよいよ重要無形文化財制度ができ、日本伝統工芸展がスタートしたばかりの初期の段階で、日展にも日本伝統工芸展へも出品することが2・3年ほどあったのでしょうか。しかし、やはり日展と日本伝統工芸展とは住み分けしなければいけないという選択を迫られるようになり、先生方はずいぶんご苦労された時期であったようです。

そして35年から、日本工芸会石川支部による石川の伝統工芸展がスタートします。その頃は、伝統工芸に対する認識は、正直言って地元でも十分理解されていませんでした。だから開催の助成金を出す県の窓口が商工課で、地場産業の伝統的工芸品産業ということと同列にしか行政は考えていなかったようです。いうなれば後発組の新しい展覧会ですから、県の日本伝統工芸展に対する理解は、よく分かっていないと言うのが正直な現状だったのではないのでしょうか。

さて、いよいよ第十回展あたりから日本伝統工芸展を金沢で開催できないかという陳情に、当時の日本伝統工芸展、日本工芸会の中心的役割を果たしておられた松田権六先生が石川県に来られました。十回展は38年ですけれども、一般的に展覧会の予定はその前年か、その前々年あたりから、スケジュールをどんどん準備していきます。それが直前の37年の秋頃に、木村雨山先生、前大峰先生や大場松魚先生なんかも一緒であったと記憶しておりますが、石川県は工芸王国であるということ、また日展の改組というなかにあって新しく日本工芸会に積極的に協力される先生方が具体的に見えてきた時期でもあり、是非十回という節目を記念して石川県で開催したいという申し出があったわけです。

そのとき私ども部内でいろいろ議論があったわけですが、美術館を作った行政の立場からすると、美術館は美術の展覧会をやるところで、地場産業の展示会場としては使うべきではないという意見がそのとき強く出てまいりました。そして松田先生は大変血相を変えて、「彼らの考えているのは、日展以外は展覧会ではないようなことを言う、けしからん」というようなことで、知事に直接お話を参られたようです。

そのときの美術館長は金属工芸、加賀象嵌の日展作家でございました高橋介州先生で、私に向かって「今中西知事から話があり、展覧会をやることになったから、その窓口になるように」と、突然そういう話になりました。今後美術館の運営に日本伝統工芸展の開催がどう影響してくるか心配しましたが、以後今日まで大変長い間、先生方とのお付き合いが始まる最初の仕事がこうして始まったのです。

企画展示室

第11回北陸国画グループ展(絵画・写真)

2月7日(土)~11日(水・祝)第7~9展示室)

北陸国画グループ展は、国画会会員の柏健が中心となって呼びかけた北陸三県の国画会出品者を主体として構成されています。国画会は、毎年春に本展を東京都美術館において開催し、本年で第78回を迎える公募団体です。

今回のグループ展出品者は絵画部の安達博文、柏健、堤建二、寺田栄次郎、開光市、前田昌彦、大森啓、長谷川宏美、ヒラキムツミ、本田正史ら22名に、写真部の富岡省三、中川保雄、野村輝久ら24名が参加し、力作を2、3点ずつ発表します。安井賞展、昭和会展などでの受賞者も多く、ハイレベルな作品が期待されます。フリースペース展示では北本真隆、宮川布美子の作品をまとめてご覧いただけます。是非ともご覧下さい。

入場無料

連絡先 能美郡辰口町緑ヶ丘11-5 横江昌人
☎0761-51-4150

第27回金城大学短期大学部 美術学科卒業制作展

2月14日(土)~17日(火)第7~9展示室)

本学美術学科の卒業制作展は27回目となります。今年度はデザイン32点、マンガ・キャラクター15点、日本画14点、油画16点、染色・ファッション10点、陶芸・オブジェ8点の合計95点を出品の予定です。また、各部門の研究生の作品が加わります。是非ともご覧の上、厳しいご批評をいただければ幸いです。

入場無料

連絡先 松任市笠間町1200
金城大学短期大学部美術学科 堀 一浩
☎076-276-4411

金沢大学教育学部美術教室 卒業・修了制作展

2月21日(土)~24日(火)第7展示室)

絵画、彫刻、デザイン、工芸、美術科教育の各分野の学部、大学院生による平成15年度卒業・修了作品及び論文等パネルを展示します。これらは、教員のほか、

多様な分野へ進出を目指す学生達が、自らの学生生活の総決算として地道に努力を重ね、かつ創造的に研究し制作して完成させたものです。展示点数は数十点、是非ご高覧下さい。そして忌憚のないご批評、ご助言をお願いします。

入場無料

連絡先 金沢市角間町
金沢大学教育学部美術教室 宮下孝晴
☎076-264-5583

2004毎日現代書北陸代表作家展

2月21日(土)~26日(木)第8・9展示室)

わが国の書展で最大規模と歴史を誇る毎日書道展に結集する、北陸三県在住の代表作家の作品を、一堂に集めたスケールの大きな書道展です。出品作家は日本の書壇を代表する毎日書道会理事をはじめ、三県の名誉会員、審査会員、会員のほか気鋭の選抜の方々です。作品は約180点にのぼり、漢字、かな、近代詩文書、大字書、篆刻、刻字、前衛書とあらゆる分野を網羅しており、多彩な現代書の美を感じとっていただけるはずです。多くの方々のご来場をお待ちしております。

入場無料

連絡先 金沢市広岡1-2-20 毎日新聞社北陸総局
☎076-263-8811

第13回北國水墨画展

2月28日(土)~3月3日(水)第7~9展示室)

石川県内の水墨画愛好団体を網羅した統一展です。近年、愛好者の増加と作品の向上が著しい県水墨画界の結束を図るとともに、愛好者拡大を目指すねらいの展覧会で、作品は広く愛好者から公募して審査し、入選、入賞作に加えて委嘱作品も併せて展示し、水墨画の魅力伝えるものです。

入場料

一般・大・高生 500円(400円)
中学生以下無料 ()内は団体料金
当館友の会会員は、会員証提示により
団体料金

連絡先

金沢市香林坊2-5-1 北國新聞事業局
北國水墨画展事務局
☎076-260-3581

2月の行事案内 《入場無料・いずれも午後1時30分から行います》

月日	行事	内容	会場
2/1(日)	CDコンサート	20世紀の名指揮者 レナード・バーンスタイン 3 フランク 交響曲二短調ほか(約60分) 演奏 フランス国立管弦楽団	ホール
2/7(土)	土曜講座	保存のはなし (宮衛 学芸第二課長)	講義室
2/8(日)	月例映画会	能面 - 鈴木慶雲 -(25分) 衣装人形 - 堀柳女 -(25分)	ホール
2/14(土)	土曜講座	さまざまな人体表現 - 水彩・素描・版画 - (吉村尚子 学芸員)	講義室
2/15(日)	月例映画会	雪よりも白く - 小千谷縮 -(25分) 朱は深く彫りに沈む - 村上堆朱 -(25分)	ホール
2/21(土)	土曜講座	近代の数寄者 原三溪・松永耳庵 (高嶋清栄 学芸専門員)	講義室
2/22(日)	連続講座	開館20周年記念連続講座 美術館よもやま話 石川の美術を彩る作家たち 講師:嶋崎 丞(当館館長)	ホール
2/28(土)	土曜講座	ラファエロ 人と芸術 (織田春樹 学芸主任)	講義室
2/29(日)	月例映画会	伊勢染型紙(25分) 水引と父と娘と - 水引工芸 -(25分)	ホール

2月の全館休館日は3日(火)~5日(木)です。

薄端うすばたというのは、広口の上皿の中央に筒状の生け口がある金属製の花器のことで、この作品は酒好きな猩々の持つ大杯を薄端に見立てた、とてもユニークなものです。

地金じがねは銅に錫すず、亜鉛、鉛などを加えた、やや赤みがかった茶色の唐金からかね（別名青銅）です。膝には銀で青海波せいがいは、胴の前掛け、袖の内側には金、銀、赤銅、素銅などで鳳凰や桐の花葉が細かく象嵌しょうがんされています。全体は猩々、大杯、毛髪、柄杓の4つの部品で組み立てられ、重い大杯は両手と背中に差した柄杓の3箇所です。バランスよく支えます。

さてこの猩々の正体はというと、中国の想像上の怪獣なのです。といっても人に似ていて、子供のような声、言葉も分かり、しかも酒好きで何とも愛嬌のある輩やからです。そしてこの伝説に取材したのが能楽の「猩々」。中国の親孝行な男が揚子江のほとりに酒を用意して待っていると、猩々が現れて酒を飲み、舞を舞い、酌めども尽きぬ酒壺を与えて祝福するという、とても縁起のいい内容です。舞台では笑みをたたえた赤い童顔あかがしらの面を着け、赤頭をかぶり、上着も袴も赤地という赤ずくめで登場し、酔いと無邪気な童心の象徴とされています。昔から袱紗ふくさに使われたり、絵画の題材とされたりして親しまれてきました。当館にも「七人猩々図」(狩野常信筆、「だより」219号で紹介)が収蔵されています。

作者の十一代宮崎寒雉は金沢生まれで、本名は尚吉なほきち。宮崎家は加賀藩の御用釜師として、主に茶の湯釜を作ってきた家柄です。最も伝統の技が活かされている釜のほか、茶の湯附属品も数多く手がけています。

第5展示室で展示中



きんぎんぞうがんしょうじょううすばた
金銀象嵌猩々薄端

みやざきかんち
十一代宮崎寒雉

天保14年(1843)~大正4年(1915)

明治15年 1882

口径47.5 高34.5(cm)

入館者数600万人突破！！

石川県立美術館では、昭和58年11月13日の開館から満20年を迎えた今年1月9日に、入館者数が600万人を突破しました!! 600万人目となったのは、野々市町にお住まいの源野辰一さんで、嶋崎館長から記念品として当館のミュージアムショップで販売している古九谷のミニチュアなどが贈られました。

源野さんは、テレビなどを通じて楽しみにしていた『北陸の人間国宝展』を鑑賞しようとお一人で来館されました。「美術館や神社仏閣を見て回ることに興味を持っています。年に4回は美術館に来て企画展は大体見えています。今年は新年早々良いことに当たった。」と話され、展覧会を鑑賞されました。



嶋崎館長より記念品を贈呈される源野さん

次回の展覧会

特集 能面と能装束
(前田育徳会・第2展示室)

特集 ガラスの美 (第7~9展示室)

3月6日(土)~27日(土)

休館日：2月3日(火)~5日(木)

石川県立美術館だより 第244号

2004年2月1日発行

〒920-0963 金沢市出羽町2番1号

TEL 076(231)7580 FAX 076(224)9550

URL <http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/>